



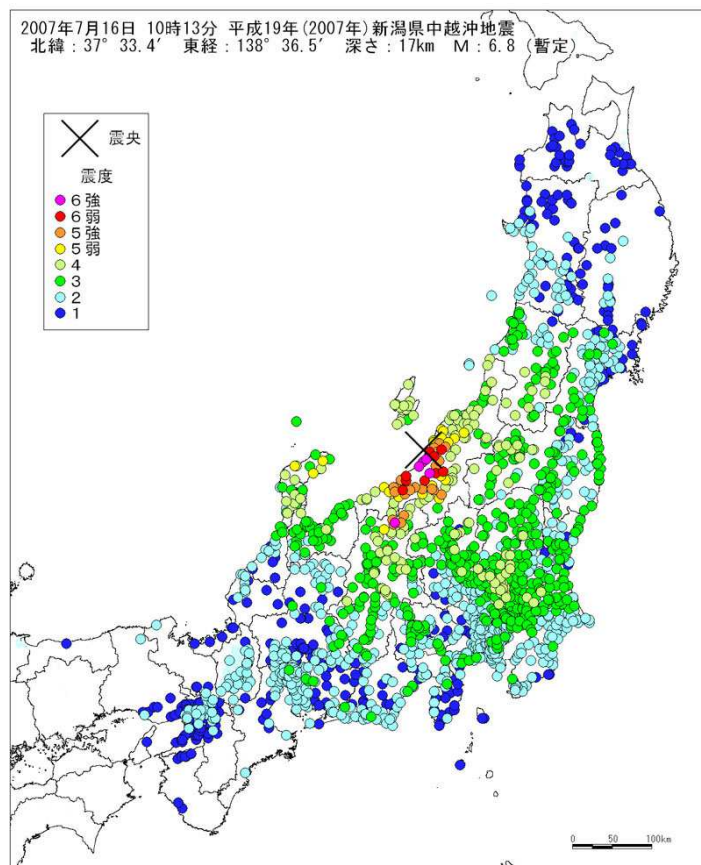
新潟県中越沖地震から10年

今から丁度10年前の2007年7月16日、新潟県中越沖地震（マグニチュード6.8）が発生しました。この地震では死者15名、負傷者2300名以上を記録しました。

この地震では、自動車各社のピストンリングを製造していた（株）リケン（現：リケン工業）の柏崎工場が被災し、製造がストップしました。ピストンリングは自動車のエンジンに不可欠であり、リケンの国内シェアは5割を占めており、各メーカーに供給していたことから、国内の自動車メーカー全社が一時的生産を中止せざるを得ない状況に追い込まれました。そのためこの地震により、事業継続計画（BCP）の重要性が現実問題として認識される大きなきっかけとなったと推察されます。

リケンは地震発生後1週間で製造を再開、2週間後には生産ラインがすべて復旧しましたが、これはリケンの従業員だけでなく、各取引先自動車メーカーの社員の支援によるところが大きかったのです。これはこの地震の規模がそれほど大きくなく、復旧の人材を各メーカーも投入（総勢800名。特にトヨタはおよそ半数の400名が支援に当たったと言われている）できたからです。ところが今後発生する事が確実な南海トラフ沿いの巨大地震では、被害は局所的ではなく、太平洋ベルト地域の極めて広い範囲に被害が及びます。

そのため、新潟県中越沖地震の時にリケンに対して行ったような支援は自社が被災している状態では、極めて困難である事が予想されます。このような事態が発生する可能性のある事を企業経営者は常に頭の片隅に置いておく必要があると思われまます。



新潟県中越沖地震の震度分布震度6弱、6強は新潟県の一部だけであった

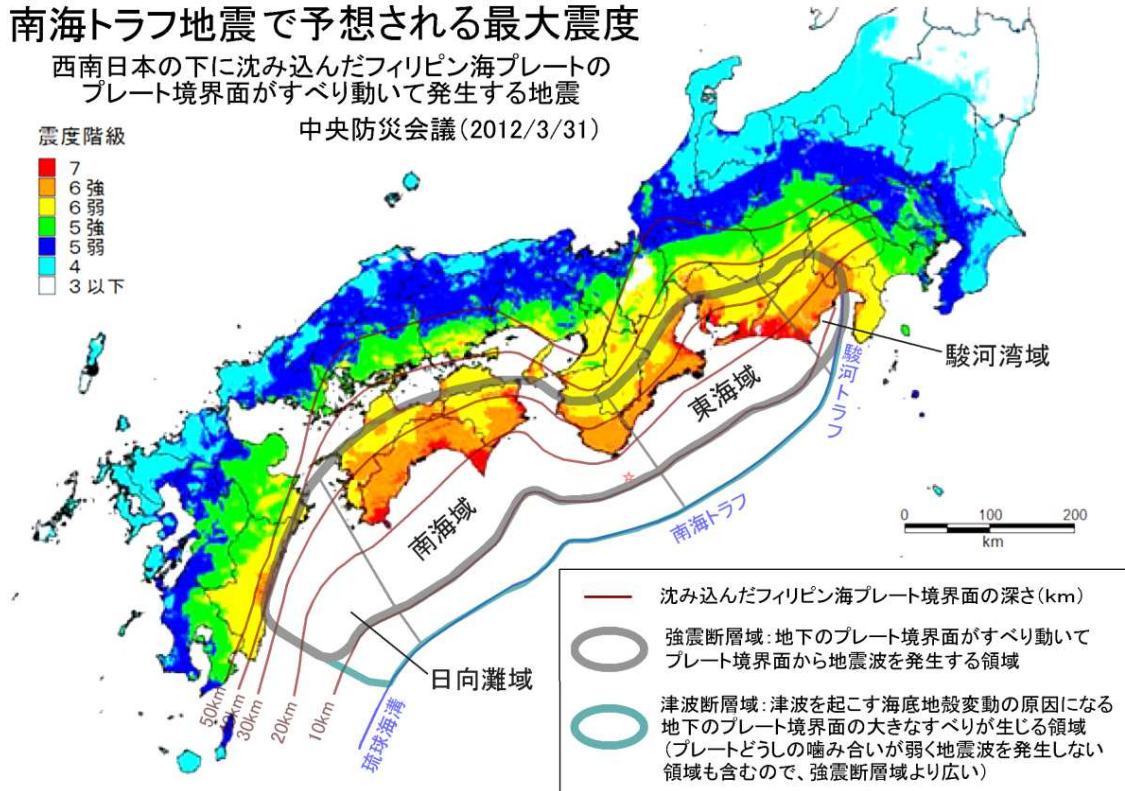
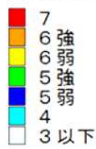


南海トラフ地震で予想される最大震度

西南日本の下に沈み込んだフィリピン海プレートのプレート境界面がすべり動いて発生する地震

中央防災会議(2012/3/31)

震度階級



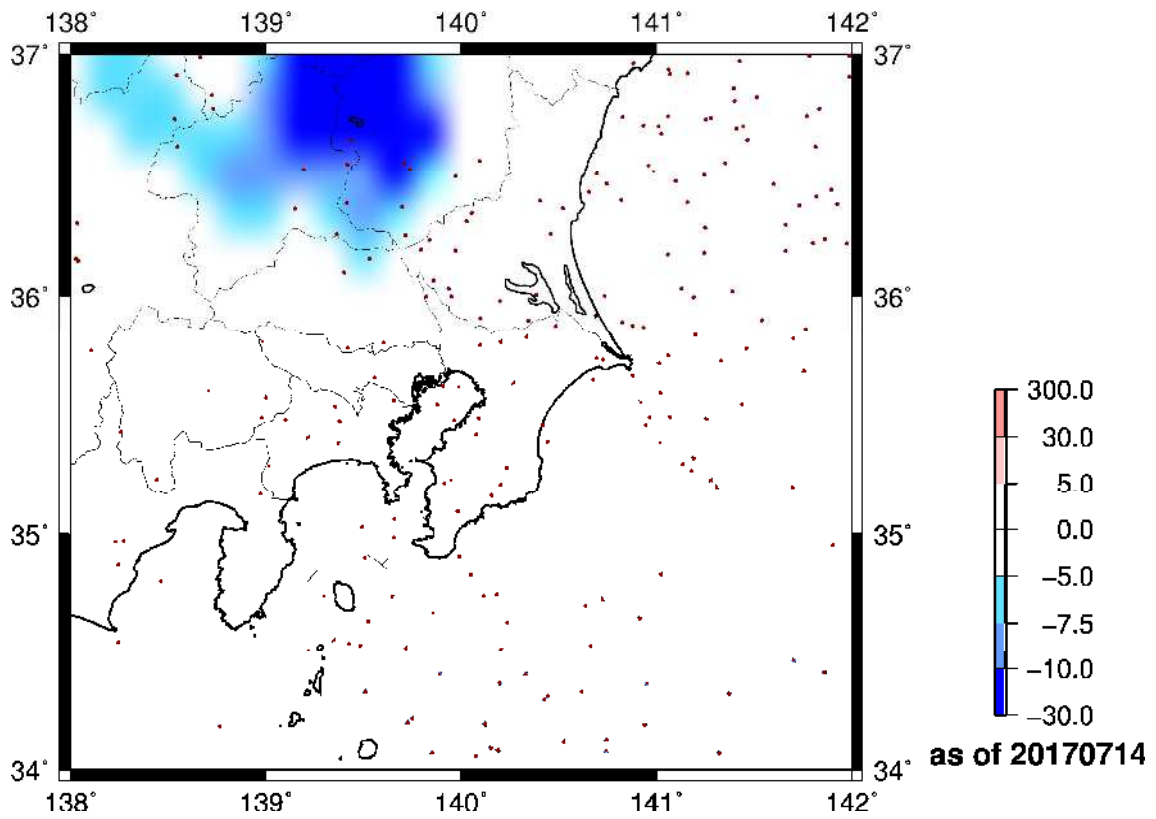
- 沈み込んだフィリピン海プレート境界面の深さ(km)
- 強震断層域: 地下のプレート境界面がすべり動いてプレート境界面から地震波を発生する領域
- 津波断層域: 津波を起こす海底地殻変動の原因になる地下のプレート境界面の大きなすべりが生じる領域(プレートどうしの噛み合いが弱く地震波を発生しない領域も含むので、強震断層域より広い)

南海トラフ巨大地震における震度分布予想図。中越沖地震と震度の色が違いますが、震度6弱以上(この図では黄・橙・赤の各色)の震度が、静岡県・愛知県、三重県、奈良県、和歌山県、大阪府、四国4県の全域および宮崎県の大部分に広がっている。広域災害である事に留意。

首都圏の地下天気図®解析

6月5日のニュースレターに続き、首都圏の7月14日時点での地下天気図をお示します。基本的に日本列島陸域の解析でも繰り返し指摘しております北信越地域を中心とする広域的な異常がこの範囲での主要な異常となります。繰り返しになりますが、地下天気図では異常が消えた後に地震が発生する可能性が高い事が経験的にわかっていますので、我々はこの異常がいつ消えるか、弱くなるかについて重要な関心を持ってきます。過去の経験則が正しければ、まだ地震発生は先という事になります。

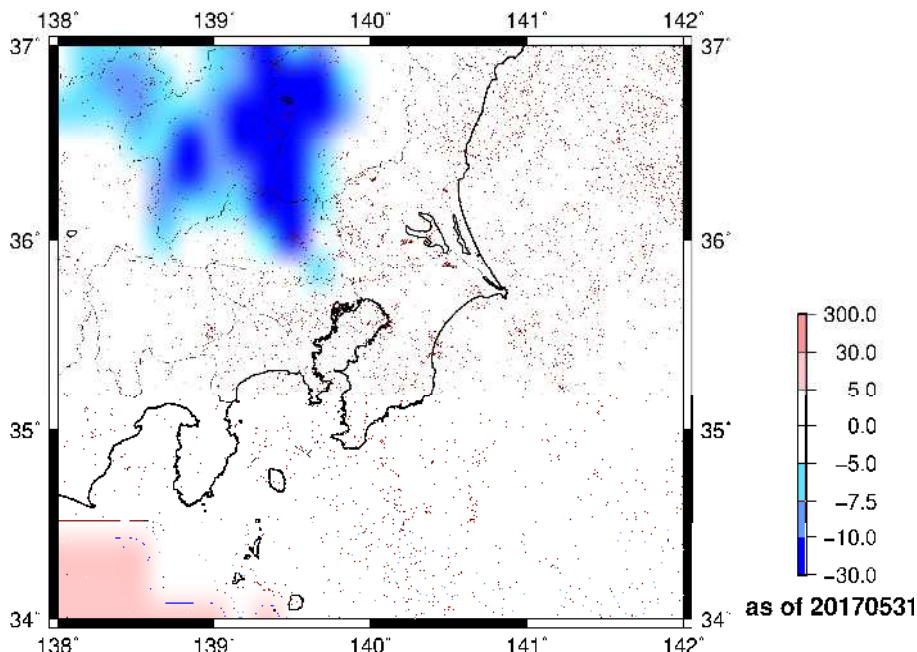
次のページの図は7月14日時点の地下天気図です。またその下側に5月31日時点の地下天気図を再掲いたします。7月14日の地下天気図の茶色の点は、5月1日以降に発生した地震を示しています。また5月31日の地下天気図の小さな点は、2011年7月以降の全ての地震を示しています。地下天気図ではある一定範囲での地震活動の消長をその範囲の平均的な地震活動と比較していますので、点(=地震)の多い場所が赤く(=地震活動が高い)なる訳ではありません。同様に点(=地震)が少ない地域が青く(=地震活動静穏化)なる訳ではありません。



7月14日時点の首都圏の地下天気図

参考

5月31日時点の地下天気図(再掲)



茶色の小さな点は2011年7月以降に発生した、解析に用いた地震を示しています